川連漆器　のお椀ができるまで

今から８００年以上前の鎌倉時代から作られていると言われている川連漆器は、昭和５１年に国の伝統的工芸品に認定されています。お椀ができるまで、たくさんの職人さんが作業を分担して、１年以上かけて作っています。時間をかけた分、きれいで温かみのある、丈夫なお椀ができあがります。

原木

お椀の材料になる「トチノキ」です。軽くて加工しやすく、割れにくい特徴があります。切って、原木を乾燥させます。

燻煙乾燥

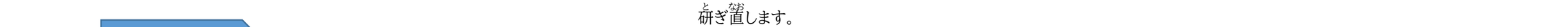
「トチノキ」は、荒挽木地師さんが、お椀に近い形に削ってから、木が変形しないよう、煙を使って十分に乾燥させます。

仕上挽き

仕上木地師さんが、自分で作った金属の型にあわせて、カンナという道具でお椀を削ります。きれいに削れるよう、カンナは何回も研ぎ直します。

荒く削ったお椀は、一週間ほどおいてから削り、製品の形に仕上げます。これを二度挽きといいます。

お椀の下の部分を高台といい、この部分を削ります。仕上挽き作業は、これで終わりです。



完成

木のぬくもりを感じる川連漆器のお椀で、給食を味わってください。何度も使っているうちに、深みのある色に変わっていきます。

乾燥

直射日光を避けて自然乾燥させるため、風呂と呼ばれる棚に約3か月入れておきます。これを硬化期間といって、漆がしっかりと乾燥し、より丈夫になります。

上塗り

最後に、「花塗り」という技法で漆を塗ります。塗った後に磨いたりせず、そのまま乾燥させることで、漆の持っている柔らかさ、ふっくらとした風合いを出す技術です。

中塗り

漆が均一になるように塗ったり、でこぼこを塞いだりする作業をした後、平らに滑らかに砥ぎあげます。この作業を2回繰り返します。

下地付け

漆や、けいそう土などを混ぜたものを、下地として塗って、乾かしてから、手触りを良くするため、紙やすりで研ぎます。この作業を2回繰り返します。